

歌舞伎公演出演傾向の世代間比較

(公財)統計情報研究開発センター

坂部 裕美子

研究の目的

戦後の歌舞伎公演データベースを用いて、親子の歌舞伎俳優それぞれが担当した役を、演じた時点の俳優の年齢で比較し、配役の傾向の変化を確認する。

研究の端緒となったのは、シンポジウム「歌舞伎の現状を批判する」(今尾哲也・近藤瑞男・中村哲郎・野村喬・鳥越文蔵、日本演劇学会紀要第24号、pp.2-50、1986年)中の「若手たちが自分の親たちの得意芸だけを伝承して非常に重要な若い時期に安易に主役をやっていた」「伝承の崩壊が起こりつつある」という記述である。この発言は25年前のものであるが、上演データの整備された現在なら、この批判の妥当性を実際の上演データで確認できる。

比較キーに「実年齢」を用いた理由は、測定が容易なので俳優自身がこの基準を意識している可能性があること(プログラムに掲載されるコメントに「この役を親父は×歳の時にやっています」という内容のものをよく見かける)、食習慣・生活習慣が変わったとは言え、同年齢時の肉体的な実力が親子間でそう大きくは変わらないと考えられること、「初舞台からの経過期間」「大人の役がつくようになってからの経過期間」などを用いるよりも集計が容易であること、などの理由による。

データの概要

集計対象とするデータは、(社)日本俳優協会が「歌舞伎公演データベース - 戦後から現在まで - 」と題して公式HP「歌舞伎 on the web」上で公開している公演データのうち、貸与を受けている1946-2005年のものである。項目には上演劇場・公演年月・演目名・配役などがあるが、演目名や役名は筋書に記載されたデータに準拠しており、標準化はされていない。このままでは、研究用データベースとして使用するのには問題が多いため、過年度の研究において、各演目への演目コード付与や、配役ごとのデータ分割などの処理を行い、集計用データベースを作成している。

集計対象

集計は初の試みなので、作業ボリュームの確認も兼ねて、対象には以下の4組を取り上げる。

- ・中村勘三郎(17代目)(1909-1988) / 中村勘三郎(18代目)(1955-)
- ・中村芝翫(7代目)(1928-) / 中村福助(9代目)(1960-)

・尾上梅幸（7代目）（1915-1995） / 尾上菊五郎（7代目）（1942-）

・松本白鸚（初代）（1910-1982） / 松本幸四郎（9代目）（1942-）

及び中村吉右衛門（2代目）（1944-）

2011 年時点の歌舞伎界で、舞台では親子どちらも「主役」を演じ、かつ相応に長生きしておりⁱ、さらに、直接比較を目的とするため、親子で演じる役柄にあまり乖離がないⁱⁱ、という条件に適う親子をピックアップしたが、東京ではほぼこの4組に限られるのではないと思われる。

比較結果

1 同一演目への出演傾向 - 三大狂言を例に -

過年度の研究において、この間最も上演回数が多かったのは「仮名手本忠臣蔵」であることが分かっている。そこで、上記の9名の忠臣蔵への出演実績を確認した。

上記の俳優の忠臣蔵への出演履歴を俯瞰すると、まず最初は大星力弥で座組に入り、その後おかる・勘平を経て塩冶判官、という流れがあるようである。（ただし、完全に移行するわけではなく、勘平は50代でも演じられている。）

受領データ中で初舞台からの出演記録がほぼ網羅されていると思われる菊五郎（7）および勘三郎（18）の記録を見ると、最初の力弥は、菊五郎（7）23歳、勘三郎（18）20歳となっている。逆に、最後に力弥を演じたのは、菊五郎（7）は30歳、勘三郎（18）22歳であるⁱⁱⁱ。親世代を確認してみると、梅幸（7）の最後の力弥は32歳と、子の菊五郎（7）とほぼ変わらない。勘三郎（17）に関しては、俳優協会データ中には力弥を演じた記録がないのだが、著書「十七世中村勘三郎—自伝 やっぱり役者」の附録に配役の記録があったのでこれを確認したところ、力弥は21歳で1度演じたのみであった。

さらに、「忠臣蔵」中ではこの2組の親子よりも「女形」寄りの役を演じる傾向のある芝翫（7）・福助（9）の親子の例でみると、芝翫（7）は最初の力弥が21歳で最後の力弥が31歳、福助（9）は力弥役は20歳の時に1度演じたのみとなっている。昭和30年代生まれの勘三郎（18）や福助（9）は力弥役の卒業が早いような印象があるが、全般的に近年の若手は力弥役のステップを省略する傾向にあるようで、俳優ごとの配役記録を見ると、さらに下の世代の菊之助（5）も1度しか演じておらず、勘九郎（6）は力弥役の記録がない。

勘平は、菊五郎（7）の初役は28歳、勘三郎（18）の初役は27歳で、親世代である勘三郎（17）の39歳よりかなり若い（受領データでは、梅幸の最も若い配役記録は29歳だが、梅幸は少なくともそれ以降勘平を演じていない）。おかるの初役は、菊五郎（7）は22歳、勘三郎（18）は31歳、親世代の勘

三郎（17）は、16代羽左衛門と一日替わりで38歳となっており、菊五郎（7）のおかるがかなり早い
が、これは、菊五郎（7）の女形の役への取り組み方の違いと考えられる。菊五郎（7）は、30代くら
いまでは女形を中心に演じており、立役に重きを置くようになったのは後期になってからなのである。

判官役に関しても、この転向の経歴の影響が大きく出ている。実は菊五郎（7）は力弥を演じる前に
1度だけ判官を演じており、初役は22歳だった。その次に判官を演じたのは41歳で、梅幸（7）のデ
ータ中最初の判官役35歳を上回るが、この間はずっと女形としておかるや顔世御前を演じているので
ある。ちなみに判官を勘三郎親子で比べると、初役は17代39歳、18代27歳と、子世代の方がかなり
早くなっている。

もう一組の親子の子世代である 幸四郎（9）・吉右衛門（2）はこのようなステップを経ておらず、
吉右衛門（2）が七段目の平右衛門を3度ほど演じた後、1980年の歌舞伎座での忠臣蔵通し興行で、孝
夫（現・仁左衛門）や海老蔵（現・團十郎）とこの二人の役替わりで、それぞれが初役で由良之助や勘
平を演じている^{iv}。

参考として他の「三大演目」における子世代の初役の年齢を見てみると、「義経千本桜」川連館の場
の「佐藤忠信実は源九郎狐」は、勘三郎（17）45歳、勘三郎（18）26歳で、子世代の方が若くして務
めている（ちなみに菊五郎（7）の初役は38歳だが、先述の立役転向の影響が考えられる。梅幸（7）
は忠信を演じていない）。ただし、こういった前倒し傾向は、若手にとにかく早く演じさせたいと思わ
せる、いわば華のある役に限られるようで、演技力が要求される割に地味な印象の「菅原伝授手習鑑」
寺子屋の場の戸浪の初役は、勘三郎（17）36歳・勘三郎（18）38歳とあまり変わらない。

2 同一年齢期の総担当役数

データに白鸚（初）・勘三郎（17）・梅幸（7）の20代～30代前半のデータが存在しないため、全員
分のデータが存在する「36-40歳の5年間の担当役数」（通し上演時の同一役の担当は複数計上）を集計
した。併せて、その中に「上演回数10回超の演目」（＝近年でも高頻度で演じられる演目^v）がどのく
らいあるかを算出した。

勘三郎（17）		梅幸（7）		芝翫（7）		白鸚（初）	
担当役数	高頻度 演目率	担当役数	高頻度 演目率	担当役数	高頻度 演目率	担当役数	高頻度 演目率
138	81.16%	211	73.46%	93	68.82%	170	80.59%

勘三郎（18）		菊五郎（7）		福助（9）		幸四郎（9）		吉右衛門（2）	
担当役数	高頻度 演目率	担当役数	高頻度 演目率	担当役数	高頻度 演目率	担当役数	高頻度 演目率	担当役数	高頻度 演目率
134	85.07%	85	78.82%	109	80.73%	59	71.19%	101	84.16%

...幸四郎（9）は36歳の時にNHK大河ドラマで主演しており、この年は歌舞伎公演に1度も参加していない。

芝翫を除いて親世代の方が子世代より演じた役の数が多く、また、俳優として研鑽を積むべきこの年齢期に、ほとんど上演の機会のないような新作などにも親世代の方がより積極的に出演していたことがうかがえる。

そして、子世代の担当役数が親世代より少ない理由として、テレビドラマの興隆は十分に考えられる。表の注記に書いた幸四郎（9）以外に、菊五郎（7）も勘三郎（18）もこの期間中にテレビドラマの主演作品がある。

今後の課題

・劇場の格付け

今回は、試みとして作業の単純化を図り、集計には最低限のデータしか使用しなかったが、例えば同じ役を演じたとしても、「歌舞伎座」の興行で演じたのか、それ以外の、例えば普段は歌舞伎を上演していないような劇場の公演で演じたのかでは意味合いが大きく異なる。特に、「東横劇場」や「浅草公会堂」は若手登用の場として扱われており、上演劇場は配役の持つ意味に大きく影響を与える。ただし、「上演劇場」という属性を付与するには、別途劇場ごとの格付け作業が必要になる。

・その当時の俳優構成との関連

親子間のデータを直接比較していて気づいたのが、芝翫（7） - 福助（9）親子の「立女形」格の役の少なさである。これは、この2人が年齢的には存分に活躍できる時期に、歌右衛門（6）や玉三郎（5）という「絶対的立女形」が君臨していたことと関連があると考えられる。こういった事象の時系列比較用の相対化は非常に難しいが、該当期間の他の俳優の活動状況について、何らかの考慮を加えられればより現実的な分析が行えるのではないか。

・望ましい「研鑽」とは

忠臣蔵の「ステップアップ」に見られるように、例えば「籠釣瓶」ならばハツ橋を演じる前に九重を、「伊勢音頭」であればお紺を演じる前にお岸を、「魚屋宗五郎」ならば宗五郎を演じる前に三吉を

演じていれば、「その役についてあらかじめ同じ舞台上で勉強した上で本役を担当する」ということになり、これを望ましい「研鑽」の方法であるとすることは可能である（少なくとも、いきなり大きい役で出るよりは望ましいだろう）。しかし、このように一つの演目の配役に「勉強が出来る役」と「大役」が用意されている演目は、実はさほど多くない。このため、類似演目の同系の役のグループ化処理の可否について、考察の余地がある

・ 1930 年代の配役データの発掘

本論の冒頭に挙げた発言は、その時期から考えて、安易に模倣されたとする「自分の親たち」とは、梅幸（7）・勘三郎（18）世代を指していると思われる。実際に、「ビッグ6」と呼ばれ、苦境下にあった戦後歌舞伎を支えたこの「親たち」世代が若手の時分に、菊五郎（6）や歌右衛門（5）の指導の下で実際にどんな研鑽を積んできたのかは非常に興味を持たれるところだが、データが揃っておらず確認できない。何らかの形で、今後データが発見されることを期待したい。

ⁱ 11 代目團十郎は 56 歳で、初代辰之助は 40 歳で他界している。

ⁱⁱ 6 代目歌右衛門と現・梅玉や現・魁春の担当した役には不一致が多い。

ⁱⁱⁱ データ中には 45 歳での担当記録も存在するが、これは松竹百年記念興行の最終公演でもある南座顔見世興行の、稀代の顔合わせにおける配役であり、ここでの分析の目的と合致しない。

^{iv} 幸四郎（9）・吉右衛門（2）は、20～30 代相当の期間東宝に移籍していたが、この間の東宝歌舞伎での忠臣蔵上演は 1 度だけであった。

^v データ掲載の上演演目は 1411 あるが、上演回数 1 回のものが 800 あるなど個々の演目の上演頻度は偏りが大きく、「上演回数 10 回超の演目」の公演が、全公演の約 70% を占めている。